

新 おおさか KEYワード【第16回】

「市役所竣成」がデザインの見本文字の図案も活力が満ちる

春は“お花見”にちなんだ話題を書いたが(新おおさかKEYワード第12回)、今回は暑い夏に、大正昭和のレトロな文字をながめ、避暑気分に使ってみたい。

大阪ゆかりの本に、大正14(1925)年に出た藤原太一『図案化せる実用文字』がある。新聞や雑誌、パンフレットなどから目を引く書体をあつめて、広告や掲示板の参考にするレタリングの図案集として編集された。日本のグラフィックデザインの礎を築いた杉浦非水(1876~1965)の校訂と序があり、現代ならパソコンのフォント集とでも言えるだろう。昭和4(1929)年に第8版が出るなど需要が結構あったらしい。

どこに“涼”があるのか? 表紙のカラー図版をご覧ください。年末の催事も混在しているが、「夏物大櫛さらへ」「大見切櫛さらへ」「新柄呉服見切売出し」と混ざって、水色の「涼を求むる人…」の字がとりあげられている。

読み方だが、わかりにくいのが「人」の字の右にある髭のような点々だろう。「等々」の「々」のように前の音を繰り返す記号で、「ノの字点」と呼ばれ、「人ノ人」は「人々」と読んで「涼を求むる人々は」となる。

恐らく、海水浴や夏山登山で避暑を勧める鉄道会社や、ホテル・旅館のパンフレットに印刷された宣伝文句を切り抜いたと思われ、ばしゃっと打ち水をしたように、文字を囲んで、“涼”が演出されている。

出版の「大鐘閣」は大阪で設立された書店で、「大阪三休橋南」つまり長堀通りから三休橋を南にはいった今の中央区東心斎橋にあった。大正9(1920)年、北野恒富の木版画に吉井勇の歌を添えた『新錦絵帖 浮世絵の顔』など趣味性の高い本を刊行し、後に東京に移った。『図案化せる実用文字』は東京での刊行だが、大阪の洋画家鍋井克之(1888~1969)も本書に関係したり、サンプルに選ばれた文字からも大阪情報満載のレタリング集であることがわかる。

例えば挿図にあげた「祝大阪市役所竣成」である。普通こんな言葉を見本にとりあげるだろうか。ネオ・ルネッサンス様式の壮

麗な三代目の大阪市庁舎が竣工したのは大正10(1921)年である。このときに「にぎわいまさる大阪市」と歌われる大阪市歌も制定された。

「祝大阪市役所竣成」は、式典や広報物などに実際に使用された文字を転載しているはずだが、書体は大正時代の雰囲気そのまま、先がピンカールのように巻かれた書体からは、役所では職員が誰かが巻き上がった髪型や髭を生やしているのかと錯覚してしまいそうだ。アールヌーヴォーの余韻も漂い、甘酸っぱい少女歌劇のタイトルにも見えてくる。

「大阪市高麗橋心斎橋筋南」という文字もある。高麗橋と心斎橋筋の交差点を南に入ったという住所表示で、現在の中央区高麗橋三丁目である。隷書など漢字の重厚な書法を踏まえながら、こちらもモダンでキラキラした感じだ。

全国向けの図案集に、大阪の地名や出来事が載るのは厚かましいように思われるかもしれないが、本書刊行の大正14年、大阪市は第2次市域拡張で東京市を抜いて、日本最大の都市「大大阪」へと発展する。日本一の都市の文字がお手本として載ることに不思議はない。一冊の図案集に過ぎないが、そこには、かつての大阪市の実力がうかがえる。

そう考えると“涼”を求めた一冊だが、大阪人にはプライドが高ぶって、かえって暑いかもしれない。



【大阪市高麗橋心斎橋筋南】
この文字は右から左へ読む



今年も船渡御は催されない。モダンな文字に天神祭の活気をしのびたい。

祝大阪市役所竣成

【祝大阪市役所竣成】
『図案化せる実用文字』より

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の現象―』(創元社)など。